

主イエスの母マリヤは「神の母」と呼ばれ、昔から人々の注目の的でした。ある時代や、ある地域では、それが行き過ぎて迷信的なものになったこともありました。マリヤが主の母となったのは、「おめでとう、恵まれた方。」とあるように神に祝福されてのことでした。しかし、マリヤは「神の母」「主イエスの母」とは呼ばれても、「母なる神」としては扱われてはなりません。マリヤは私たちと同じ人間であり、イエスの母になったからといって特別な存在になったわけではありません。聖書には「マリヤ」という名前を持った女性が数多く出てきます。イエスの母マリヤもまた、他のマリヤたちと同じように、キリストを信じ、キリストによって救われた者のひとりでした。マリヤが受けた幸いは、キリストの母となったことだけにあるのではなく、イエスが言われたように「幸いなのは神のことばを聞いてそれを守る人たち」ルカ 11:28 のひとりになったことにありました。

では、マリヤは、どのように神のことばを聞いたのでしょうか。マリヤは、神のことばを御使いから聞きました。御使いの最初のことばは、「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」というものでした。この時、マリヤは、なぜ御使いがそう言ったのか、そのことばの意味を知ろうとしました。「これはいったい何のあいさつかと考え込んだ」(29 節) とある通りです。マリヤは、神のことばが自分にとって何を意味しているかを知ろうとしています。このことに、マリヤの神のことばに対する真剣な態度を見ることができます。

もし、皆さんに、御使い(天使)が現われたら、皆さんはマリヤのように落ち着いた態度で、御使いの伝えるメッセージを聞くことができるでしょうか。私だったら、「ちょっと写真撮らせて下さい。ついでに聖書にサインもお願いします。」などと言うかもしれません。「御使いに出会った」ということに興奮してしまって、肝心の神からのメッセージを忘れてしまう可能性もあります。御使いの主な役割は、神のことばを人々に伝えることです。ですから大切なのは神のことばで、御使いはその使いにすぎないのです。マリヤは、驚き、とまどいもしましたが、御使いに出会ったことに心奪われることなく、御使いが伝えようとした神のことばを理解しようとしてしました。ここにマリヤの信仰を見ることができます。

次に、マリヤの信仰は、みことばに従う信仰でした。神のことばは、いくら多く聞いていても、また十分に理解していても、それを受け入れ、またそれに従わなかったなら、その力は、私たちのうちに働かないのです。聖書には「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはけません。」(ヤコブ 1:21-22) とあります。マリヤはみことばに聞くだけでなく、みことばを受け入れ、みことばに従いました。みことばに聞いて、従わないなら、それは水を砂漠に注ぎ続けているようなもので、種を蒔いても根付かないし、成長しません。

御使いがマリヤに伝えたメッセージは、マリヤには受け入れがたいものでしたが、マリヤはそれを受け入れました。マリヤが聞いたメッセージはこうです。「あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」(31-33 節) このメッセージが、救い主のことを指しているのは、マリヤにもすぐ理解できました。ユダヤの人たちは誰でも救い主がダビデの王位を継ぎ、永遠の神の

国をうちたてることを待ち望んでいたからです。御使いの伝えたメッセージは、神が何千年、何百年も前から約束していた救い主が、もうすぐ来られることを伝えるものでした。このメッセージだけなら、マリヤは、このメッセージをすぐさま受け入れ、神に感謝し、神を賛美したことでしょう。

しかし、このメッセージの他のことばも一緒に語られます。「あなたはみごもって、男の子を産みます。」これは、未婚の女性には受け入れられないメッセージでした。マリヤにはヨセフという婚約者がいて、やがて結婚することになっていました。結婚を間近に控えたマリヤは、ヨセフとの結婚に期待を持ち、夢をふくらませていたことでしょう。そんな彼女に与えられた「あなたはみごもって、男の子を産みます。」というメッセージは、とても受け入れがたいもの、残酷なものでさえありました。当時のユダヤで、未婚の女性が妊娠することがあれば、ユダヤの社会で生きていくことができませんでした。また、当時の婚約は結婚と同じくらいの重みがありましたから、ヨセフと結婚する前にみごもったマリヤは、ヨセフに離縁され、姦淫罪で裁かれるかもしれなかったのです。御使いが伝えたメッセージは、マリヤにとって、それほど大変なことだったのです。御使いはマリヤに「おめでとう。恵まれた方。…あなたは神から恵みを受けたのです。」と言いましたが、マリヤにとっては全く「めでたい」話ではありませんでした。めでたい話どころか、大きな重荷だったのです。しかもその「重荷」は出産の後も続くのです。マリヤは、その後、ヨセフとの間にヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンという男の子たちと女の子たちを生みましたが（マルコ 6:3）、夫ヨセフは、イエスが公に伝道を始めの前には亡くなったようです。ですからマリヤは長男のイエスを頼りにしたことでしょう。しかしイエスは、30年後、弟たちにマリヤと家族を任せ、伝道の生涯に入ります。そればかりではなく、マリヤは、イエスの十字架の死を目の前で見るようになるのです。親にとって、子どもを先に失うほど、悲しいことはありませんが、自分の息子が目の前で苦しみ死んでいくのを見るほどつらいことはなかったでしょう。イエス誕生から少し年月を経て、神殿にイエスを神にささげ（献児式）に行った時にシメオンという老人から「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。」ルカ 2:34-35 という預言をマリヤは聞きます。そのとおり、マリヤはその心を剣でさされるような試練を通らなければならなかったのです。

このような大変なことが待ち構えているにもかかわらず、マリヤは、神のことばを拒みませんでした。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」（34節）というのは、マリヤが救い主の母になることを拒否した言葉ではありません。これは素朴な質問です。マリヤに、神のことばを受け入れる心があったからこそ出てきた疑問です。「疑問」は「疑い」とは違います。「疑い」というのは神が正しいお方であること、神が私たちを愛しておられることを信じないことです。しかし「疑問」は、神のみこころを知りたいと願う思いから出るものです。私たちは、神のなさることのすべてを、すぐには知ること、理解することもできません。聖書を学ばば学ぶほど、疑問や質問が増えてくるかもしれません。神を信じるというのは、そうした疑問にすべての答えを得てからすることではありません。そうではなく「私には分からなくても、神は知っている。今は理解できなくても、神は最善をしてくださる。」と信じていくこと、「こんな理不尽な目にどうして会わなければならないのかと思っても、ここにも神の愛と恵みが備えられていることを信じる」そして神のあわれみを信じて、神に信頼していく、そこに信仰があるのです。

御使いは、マリヤに「神にとって不可能なことは一つもありません。」（37節）と答えました。マ

リヤには自分の身に何が起こるのか、将来、何が待ち受けているのか、分からないことばかりでした。しかし、「神にとって不可能なことは一つもありません。」ということばは彼女を納得させるものというよりは「もうあれこれと悩む必要はない。」という言わば宣言、断言に近い神のことばでした。つまり「これからのことは全て神がなさることなのだ。マリヤ、あなたのすることは神のなさることを受け入れることです」と言われるのです。信仰とは何でしょうか？神がすでにしてくださったものを受けとること、受け入れることです。私たちの救いもそうです。私たちが罪から救われるため、何かをしなければならないではありません。私たちの罪が赦されるために必要なことはすべて、キリストがすでに成し遂げてくださっており、私たちが神に従って生きるためのすべてのことも、聖霊がすでに備えていてくださっています。救われるのに必要なのは、キリストとその救いを受け入れるだけです。聖書に「しかし、この方(イエス・キリスト)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」(ヨハネ 1:12) とある通りです。

神のみわざを受け入れるということは確かに受け身ですが神の全能の力が働くために、自分をささげるといふ、積極的な面もあります。神は、マリヤとの会話も何も無しに神の子を生ませることもお出来になったでしょう。しかし神はマリヤの積極的な承諾を求められたのです。マリヤは、自分を神にささげて「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と答えています。御使いが伝えたメッセージは、マリヤに、通常以上の不安や心配、思い煩いをもたらすものでした。はたしてヨセフの理解を得られるだろうか、結婚前の妊娠が周囲に知られたらどうなるだろうか、神の子の母となるという重い責任に耐えられるだろうか、など心配と不安は尽きません。しかし、最終的にマリヤは、そうしたことをすべて神に委ね、「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と自分をささげたのです。

人生は、不安や心配、思い煩いで満ちています。ある人が「心配は朝から晩まで、不安は年がら年中、人の心につきまとう思い煩いは人の呼吸にも似て、絶えることがない。」と言いましたが、ほんとうにそうです。「生きる」ということと、「心配する」ということはまるで同義語のようですが、こうした不安や心配、思い煩いに勝つことができるのは、信仰によってです。マリヤのように、どんなに難しい状況に置かれても「あなたのおことばどおりこの身になりますように。」との信仰をもって、神に一切を委ねる時、私たちは不安から、心配から、思い煩いから解放され、この不安定な世の中で、安定した歩みをすることができるのです。神のことも、キリストのことも良く分かる、私もクリスチャンになりたいけど、クリスチャンになったらどうなるのだろうか、あのことは大丈夫だろうか、このことが心配だと、信仰を言い表すのを躊躇している方はいませんか。今朝、それら一切を神にまかせましょう。神がすべてをしてくださいます。また、すでに信仰を持っていても、思い煩いに負けてしまっている方はいませんか。もういちど、「神にとって不可能なことは一つもありません。」とのおことばに立ちましょう。神のことばに聞き、それに従う人に、神は不可能を可能にし、マイナスをプラスに変えていく人生を与えてくださるのです。